



つくるということ

金子 岡村さんはとてもパワフルな方でしたが、細かな部分へのこだわりも印象的でした。理科の教員をされているということもあって、専門的な質問もありましたし、さすがだなと思いました。

岡村 金子さんは私のペースに合わせて指導していただきましたし、質問にも丁寧に答えていただいたので、スムーズにできました。私は若い頃、島しょで勤務していました。当時、島ではお金で物がそろうわけではなく、食料からテーブルなど家財も拾ったりもったりした材料で、自分で作りました。「やればできる」自分の発見です。ただしそれは、学校でも生活でも自分たちのためのものであり、他人のために作るプロの技術とは違います。

金子 私はこのものづくりの仕事で、人との関わり合いをもち、社会貢献できればと思っています。自分を表現する作家としてではなく、仕事としてのものづくりですね。開業してから最初に仕事をもらった大工の棟梁から「客の期待どおりにできて当たり前。期待以上に仕上げて感動させてこそその職人」と教わったのですが、どんなオーダーでも応えられるような気概と技術というのが、ものづくりを生業にする者の心意気としてありますね。

岡村 「教育は人づくり」なんて大それたことだと思っています。人は物のように作るものではなく、自ら育つものです。私だっこの年になって新たに自分を発見しています。教員はあくまで生徒をサポートし、条件や環境を整えるだけです。

当コーナーの参加者募集!

今回は、手話&筆談カフェの仕事を体験します。受入れ先はカフェ「Sign with Me」(文京区)の予定です。体験先は聴覚障害を持つスタッフのみで運営されています。手話ができない方も参加可能です。是非ご応募ください!

応募方法 差込の「かがやき」編集担当宛てはがきにある「仕事を学ぼう!」への参加希望」の欄にチェックを入れてお申し込みください。

応募締切 平成27年1月23日(金) 必着

取材時期 1月下旬~2月上旬

混ぜながら火が均一になるように整えます。数メートル離れていても感じる熱気。夏場は暑くて仕事にならないため、早朝から作業をするというのもうなずけます。

素材になるのは、柄鏡状に切り取った厚さ約25ミリの鉄板。それを鍛造してフライパンの形に整えていきます。

「では最初に私が見本を見せます」。金子さんは鉄板全体ではなく、一部分に熱が伝わるように炉に入れます。赤くなった鉄板を見て「きれいですね」と岡村さんがつぶやきました。炉から取り出して鉄床に乗せ、木づちで叩いて成形します。「ポイントは、叩く場所は一定に

して、材料の方を動かすことです。ではやってみましょうか」と金子さん。再び炉に入れて熱し、赤くなったところで、鉄床に乗せます。待ち構えていた岡村さんは、「もうすこし強く」「もっと内側を」という金子さんの指示の下、木づちを振るえます。常温では硬い鉄板が簡単に変形するので、なかなか思いどおりにいきません。一部分だけを叩くとしわができていびつな形になってしまうため、均一になるように叩く位置や強さを調整します。

炉に材をくべている金子さんが合図すると、急いで木づちを準備し、息を合わせて指示があるまで叩き続ける。岡村さんはこの作業を何度も繰り返し、お昼前くらいにはフライパンの調理部が形になりました。



完成品を持って記念写真。「鉄の道具の良さを知るきっかけになれば」と金子さん

叩いたら、フライパンを持ち上げてさざまな方向から見てバランスを確認するという作業を繰り返します。使う時のことをイメージしながら、何度も何度も確認する岡村さん。



柄の部分は変形しやすく、成形するには微妙な力加減が必要

「日本では鍛冶というと刀鍛冶をイメージする人が多いですが、それはむしろ特殊です。かつて野鍛冶とよばれる鍛冶屋が人々の暮らしの身近にいて、農具や生活道具の製造や修理などを日常的に手がけていました。それが現代になって手軽で安い大量生産品が出回るようになり、野

職人だからこそその仕事

午後からは柄の部分を作ります。今度は熱して叩いて筒状に丸めていく作業です。「調理部と違って幅が狭いからより変形しやすく、力加減が難しいです」と岡村さん。1点を強く叩くとねじれてしまい、左右のバランスが崩れます。高温なので手で曲げるわけにはいかず、金づちを振るうのに繊細な力加減が必要になります。



金子さんはすぐ横でその様子を見ながら、アドバイスをしてくれます。

最後の仕上げとしてグラインダーで磨き、さび止めとして油を焼き付けました。30分以上かけた仕上げ作業で鉄色から黒鉄色に変わり、世界にたった一つのフライパンが出来上がりました。手に持って掲げ、誇らしげに見つめる岡村さん。



鍛冶屋の仕事は地道な作業の繰り返しです。しかし金子さんは言います。「無理やり叩いて形を整えようとしてもうまくいきません。素材にはそれぞれ個性があつて、『こういう形になりたい』と望んでいきます。そのように誘導してあげると、自然と一番きれいな形に仕上がります」。野鍛冶の祖父を持ち、父親も職人という岡村さんは、そんな「鉄との会話」の話を聞いて、何度もうなずいていました。

鍛冶屋

Blacksmith

● 午前10時
● オリエンテーション
● 午前11時
● フライパン作り
● 正午
● 昼食
● 午後1時
● フライパン作り
● 午後3時
● 対談
● 午後3時30分
● 解散



「木工はよくやりますが、金属は初めてです」という岡村さん(左)に鍛冶の基礎知識をレクチャーする金子さん(右)

今回の組合員代表
葛飾区立双葉中学校勤務 岡村隆さん
今年度から夜間学級で理科の教員を務める岡村さん。大学までサッカー部に所属し、教員になってからは顧問として実績を重ねました。子供の頃は図工が苦手だったそうですが、今ではものづくりが大好きだそうです。

今回のプロフェッショナル
鍛冶屋「Metal NEKO」代表 金子恭史さん
大学院で生物学を学んだ後、大手メーカーに就職した金子さん。「もっと使う人の暮らしに寄り添うものづくりをしたい」と退職し、専門学校で金属加工の技術を習得。工房に住み込みで働いて腕を磨き、2006年に独立。

現代に生きる鍛冶屋

今回の参加者は、葛飾区立双葉中学校夜間学級の教員である岡村隆さん。埼玉県狭山市の田園地帯にある鍛冶屋「Metal NEKO」で鍛冶の仕事を学びます。

熱する叩くを繰り返す

岡村さんは、息子から借りたという作業着に、体験者用に用意されている革製の前掛け、皮の手袋、マスクにゴーグルを着け、万全のスタイル。炉の温度は1000度にもなり、危険も伴いますので安全第一を心掛けます。

まずは金子さんが炉に火を入れます。コークスを入れ、ガスバーナーで点火します。30秒くらいすると、コークスが赤くなりむせるような臭いと煙が出てきました。じつくり数分かけてかき

鍛冶の需要と仕事が激減したために、廃業した職人が多くいました。偶然にも岡村さんの祖父は野鍛冶をされていたということです。この不思議な縁を胸に、場所を工房に移してフライパン作りを始めます。

組合員×プロフェッショナル 仕事を学ぼう!

このコーナーは組合員が異業種の職場を訪れ、その仕事を体験する企画です。普段とは違う仕事をし、その道のプロの方たちと意見交換することで、新たに学ぶことも多いものと思われま